

まなぶくんだより

和歌山県教育センター学びの丘 広報誌



平成 30 年度全国学力・学習状況調査 和歌山県の結果の特徴

7月31日に、平成30年度全国学力・学習状況調査の結果が発表されました。小学校では、調査開始以来、国語Aが初めて全国平均を上回り(10位)、国語A・B、算数A・Bの合計の結果が、過去最高の20位となりました。中学校については、昨年度の結果をやや下回ったものの、一昨年度からは改善してきており、中でも数学A(10位)は、全国平均を上回りました。

また、今回3年ぶりに実施された理科の調査では、小学校、中学校ともに平成27年度の結果と比べて、全国平均との差が縮まっています。これらは、各学校の先生方が授業改善への意識を高め、取組を推進して下さった成果が表れてきたものと考えております。

課題が見られた問題は、小学校算数Aの「数量の関係を理解し数直線上に表すこと」(1(2))、中学校国語Bの「目的に応じて文章を読み、内容を整理して書くこと」(1三)、中学校数学Bの「事象を理想化・単純化することで表された直線のグラフを、事象に即して解釈すること」(3(1))などで、いずれも全国平均を下回りました。B問題では、読み解いたことを用いて自分の考えを書くという力が求められます。引き続き、授業改善への取組が必要と考えます。

児童生徒質問紙では、「算数・数学の授業の内容はよく分かる」と回答した児童生徒の割合が、平成29年度と比べてさらに増加し、小学校、中学校ともに全国平均を上回りました。

一方で、「授業において課題の解決に向けて自分で考え、自分で取り組むこと」や「自分の考えを発表する機会において自分の考えがうまく伝わるよう工夫すること」については、肯定的に回答した児童生徒の割合が、小学校、中学校ともに全国平均を下回りました。主体的・対話的で深い学びを実現させるため、学習課題をもとにして考えを広げ深める学習活動の充実等が求められます。

来年度の調査は、これまでのA問題、B問題の区分をなくし、「知識」と「活用」を一体的に問う問題構成で実施されます。調査時間も変更され、国語、算数・数学については小学校が45分間、中学校が50分間となります。加えて、中学校において新たに英語調査が実施されます。英語については、筆答による「聞くこと」、「読むこと」、「書くこと」の調査が45分間、コンピュータを使い、生徒が解答を吹き込んで録音する「話すこと」の調査が約15分間となります。

各学校においては、新学習指導要領で重視されている「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」を身に付けた児童生徒を育成するため、引き続き不断の授業改善が求められています。和歌山県の児童生徒のため、これからも学校、市町村教委、県教委で力を合わせ、ともにがんばっていきましょう。



和歌山県(公立)と全国(公立)の平均正答率(%)

	小国A	小国B	小算A	小算B	理科	中国A	中国B	中数A	中数B	理科
県	72	55	63	51	60	75	59	67	45	65
全国	71	55	64	52	60	76	61	66	47	66
差	1	0	-1	-1	0	-1	-2	1	-2	-1

※平成28年度から、平均正答率については整数値で示しています。

和歌山県(公立)平均正答率と全国(公立)平均正答率との差の推移

	小国A	小国B	小算A	小算B	理科	中国A	中国B	中数A	中数B	理科
H26	-4	-3	-1	-2		-2	-3	-1	-3	
H27	0	0	1	0	-2	-3	-3	0	-2	-3
H28	-3	-2	-1	-1		-2	-4	0	-1	
H29	0	-1	0	0		0	-2	0	0	
H30	1	0	-1	-1	0	-1	-2	1	-2	-1

『児童生徒質問紙』の結果にも注目!

「質問紙調査」からは、学力向上のための授業改善に役立つヒントがたくさん見えてきます。自校の結果の分析や全国の結果との比較等を通じて、今後の改善に役立ててください。



2 年次教員と中堅教員によるクロスセッション

教育センター学びの丘では、今年度の新しい取組の1つとして、7月30日(月)・31日(火)に、2年次教員及び中堅教員による授業改善についての合同研修(クロスセッション)を実施しました。

まず、中堅教諭等資質向上研修の午前において、「授業改善の理念と方法」について教育センター学びの丘指導主事が講義・演習を行うとともに、午後のクロスセッションでの若手教員に対する指導助言のあり方や意義について協議しました。

クロスセッションの本番となる午後は、2年次教員と中堅教員が合同で、「授業改善に向けて」と「学び続けるために一指標活用」をテーマに、グループ協議を行い、指標を活用して互いに力量向上をめざす話し合いを行いました。経験年数・校種・教科を解いた組合せによるグループで協議・演習をすることによって学びを深めました。



2年次教員の感想には、「中堅教員の方々と協議することで、自分とは異なった視点から意見を聞くことができ、大変参考になった。」「中堅の先生方と授業づくりで普段から意識していることについて協議することができて良かった。2学期の授業づくりに生かしていきたい。」や「自分の課題や成長したことを交流したとき、先輩方が共感してくれたことで安心し、いただいたアドバイスが次への意欲になると感じた。」といったものが多く、新たな目標を見出すことができているようでした。

中堅教員からは、「2年次の若い先生方と授業について話し合いが持てて良かったと思う。年数が経ち見えなくなっていた部分を思い出させてくれたように感じる。校内でも若い先生方と積極的に交流を持ちたい。」や「学び続けることが自分自身のためだけではなく、若い先生方の育成にもつながっていくということを感じた。」等、中堅教員としての自覚を深められたとの感想が寄せられました。

また、研修運営に当たった教育支援事務所指導主事からも、中堅教員について、「普段学校で見せている姿以上に、ミドルリーダーとしての役割を果たしている様子が見られた。」や「他の学校の先生方との関わりが良い刺激になっていたようだ。」といった感想が寄せられました。若手教員、中堅教員ともに、協議を深めることの意義や学び続けることの意義を実感する貴重な機会となったようです。

このクロスセッションと同じように、各校においても、世代を交えた連続的、創造的な協議を期待しています。



指標活用で学校力を高めよう！

『指標』は、キャリア段階ごとに身につけておくべき資質・能力を示す「道しるべ」です。学校でも、世代を超えて授業づくり等について話し合う機会を持ち、同僚性・協調性を高め、「チームとしての学校」の力を強めてください。

『指標』は学びの丘 HP からご覧いただけます。

http://www.wakayama-edc.big-u.jp/kensyuu_ikusei-sihyou/kensyuu_ikuseisihyou_top.html

学び続けるということ

Monthly 所長コラム 教育センター学びの丘 所長 鈴木 晴久

12 「考える」ということ

「我思う、ゆえに我在り」(Je pense, donc je suis) は、デカルトが『方法序説』(Discours de la méthode) の中で提唱したとされる有名な命題です。デカルト自身の表現ではなく、またいろいろな解釈があるそうですが、私は単純に次のように思います。

自分自身も含めて、世の中のすべてのものが本当に存在するかどうか疑ってみます。たとえば、今、

私が座っている椅子は本当にあるのか、自分が座っていると思っただけなんじゃないか、自分が吸っている空気は本当にあるのか、吸っていると思っただけじゃないのか、そもそも自分自身は本当に存在するのか… とありとあらゆるものの存在を次々と疑っていくと、最後に残るのは「疑っている自分」だけです。これだけは本当に存在する、従って「我思う、ゆえに我在り」ということ

になるのだと思います。

ですから、考えることをやめてしまうと、人間はその存在自体をなくしてしまうことになるのではないのでしょうか。

AI(人工知能)が発達して、社会に大きな影響を及ぼしつつある現在において、「考える」ということは、人間の存在にとってますます重要な要素になっていく気がします。